

母と子の対話を求めて

木元俊宏

母親への公開状



青娥書房

木元俊宏

母親への公開状

青娥書房





著者略歴 木元俊宏

昭和三十三年、東京に

生まれる。

現在、東京大学教養

学部在学中。

母親への公開状

昭和54年8月1日 第1刷

昭和54年9月20日 第3刷

著者 木元俊宏

発行者 加清蘭

印刷製本 壮光舎

発行所 株式会社 青娥書房

東京都千代田区三崎町3-1-11 〒101

電話 03(264)2023 振替 東京 9-21400

©1979

5036-11074-3972

「親と子」をテーマとした原稿を募集します。
(400字詰原稿用紙300枚)

読者へ

当初の企画は、放送キャスター木元教子氏（現在は学生でもある）が一冊の本をまとめてくださることであった。内容は母親と息子とが同じテーマで話し合うことなく書くというものであったが、できあがったものは息子だけのものつまり長男の木元俊宏の独り舞台……多忙な木元教子氏に代って、妙な親孝行をした結果になったともいえる。著者は二十歳、青春の光がまぶしい。半年前青娥書房では、十五歳の息子に対する母親の心情を綴った『現代母親考』を出版した。その後、この本の読者から、親とはロクに話をしようともしない息子たちが、何を考えているのか知りたい、という要望が多く寄せられた。文学でも評論でもない、強いていえば現代の若者思考とでもいうべき本を出版する意図は、これに込める意味でもある。家庭を、社会を、とくに母親を、どのような目でながめているか、それを探る一端にでもなれば幸いである。

一九七九年七月

■ 目次 ■

読者へ……………1

第一章……………開き直った息子の胸のうち……………7

第二章……………息子が剝いだ親子のベール……………48

第三章……………息子のアイロニー……………111

第四章……………知っていますか、息子たちの生態……………177

イラスト

藤野
玲

母親への公開状

第一章 開き直った息子の胸のうち

趣味

総理府統計局が母の日にちなんで、本年（昭和五四年）五月一二日に発表した社会調査資料によりますと、世の母親族の皆様が家事や育児に費す時間は、仕事を持っている職業婦人で一日平均三時間三九分、主婦業に専念している人で六時間三分だということです。この数字を見ただけでは何という感慨も湧きません。ただ主婦業というものを「仕事」として考えることの難しさを改めて考えさせられます。一方では、切り詰めようと思えばかなり圧縮することができる、もう一方では、手間をかけようと思えばいくらでも手間をかけることができる、いうなれば芸術家とその作品の関係に喩えられましょうか。けっして

定められた一定量の仕事を機械的に片付けなければならないということです。

さて問題はその先です。職業としての仕事のみならず、こうして家事や育児に多くの時間を割かれた彼女たちが、一体どれだけの自由時間を持っているのでしょうか。男たちが持っているのと同じくらいの時間を、趣味や娯楽やスポーツ等に使うことができるのでしょうか。報告は否定的です。彼女たちが一日のうちで何ものにも気を煩わすことなく、完全な自由時間として持っている時間はなんと専業主婦で五一分。そして職業婦人に至ってはタッタの二五分だそうです。これは世の働く男性族には、なかなか信じられないことでしょう。

つい先頃、新聞やテレビで、独特の自虐的論調をもって、ふとしたミスから暴露されたEC秘密文書の中の一文が、おおいに取りあげられていたことがありました。「ウサギ小屋に住んでいる働き中毒の日本人」という、歯に衣着せぬ対日批判です。もちろん世論は沸騰、或る者はヨーロッパ人の偏見のいまだ根強いことを嘆き、さらには黄禍論の再燃をおそれ、或る者は逆にEC経済の無力を嘲り大人として無視せよと言ひ、とにかく腹の虫の収まらぬ一派は外務省から抗議文書を吐き出させ、また一方この批判を謙虚に受けとめて、もっと日本人はレジャーについて真面目に考えるべきだと説く人々もおりました。

でも、これらカンカンガクガクの論議を重ねる人々が念頭に置いていたのは、たぶん男

性をその主力とするところの、「ビ、ジ、ネ、ス」のうえでの問題についてのみであつたに違ひありません。少なくとも私は、この問題をめぐる新聞記事の中に、家庭の主婦の問題も含めて論じていたものを見たことがありますでした。一体本当の「働き中毒」はどこにいろのでしょうか。マージャンを打ち、酒を飲んで帰れる男たちでしょうか。それとも家事に縛られた女たちでしょうか。職業婦人の二五分間、これは解毒にはあまりに短かすぎます。

大学への再入学を決意する以前の私の母は、それこそ仕事仕事で追いまくられる毎日の連続でした。地方への出張や、モーニングショーのある日には、朝は六時か六時半に起きねばなりません。仕事だけなら、そんなに早く起きる必要はありません。私や弟を叩き起こし、弁当のある時には弁当を作り、そのうえ朝食の用意をせねばならぬからです。そして一週間のうち、二日は録画取りや雑誌レポーターとしての取材などで、夜帰るのが八時九時、ときには夜中の一時になります。原稿の依頼などがあれば、それからさらに仕事は続きます。一方で夕食の面倒や、掃除に洗濯を片付けねばならない。たぶん最もハードなスケジュールをこなしていた時の彼女には、例の二五分間さえ保証されていなかったに違ひありません。まさに「働き中毒」の典型です。

そんな日々の中で、彼女がだんだんと神経を擦り減らしていったとしても、それは無理

からぬことであつたでしょう。とくに危機的だったのは私が小学校から中学校にかけての頃で、彼女はいつも疲れたような顔をして頭痛の悩みを訴えていました。仕事に出かける前、彼女はさながらそれが一種の儀式であるかのように、きまって頭痛止めの錠剤をコーヒ―で呑み下していくのです。醬油みたいな濃いブラックに、三錠が一日の頓服のものを四錠も五錠もです。眉をしかめて、本当に辛そうでした。よくからだがもったものです。

私はそこまで身を粉にして働いてくれた母に、感謝せねばなりません。そして身勝手に、*「夕御飯ハマダデスカ」*などと小姑じみた口をきいて、彼女の献身のうえにどっかりとあぐらをかいていた自分を深く恥ずるものです。しかし一方で、私はそんな彼女を全面的に肯定することはけつしてありません。酷薄なようですが、働く彼女は問題を抱えていました。仕事に全力投球をしてやると我が家にたどりついた彼女は、しばしば家の中での人間達が彼女の意に反し、デレデレとルーズに、めちゃくちゃをやっているのを発見すると、こんな具合にバクハツするのです。

「マタ、こんな所に新聞散らかして！ ホントにやんなっちゃうなあ、この家のアホドモには！」

「なに、パパまだ帰ってないの？ ホントにあの欠陥ブーメランめが、またまた麻雀やつてるに違いない。マイパン、毎晩。あーあ、男はいいわねエ……」

「私だって仕事で疲れてるのよ。お願い、これ以上氣を使わせないで！ 共同生活者としての最低限のルールは守ってよ。全くこの家の人間ときたらドイツもコイツも……」

無理もないと思います。私には彼女を責めることはできません。ただし言いぶんはあります。まず、誰も彼女に私達のあと片付けの仕事を強制したりはしていないこと。そして同様に、家事をやれとも強制したりはしないこと。大変だったらやめればいいではありませんか。やろうと思えば、掃除やアイロンかけくらい父も私も自分でやることができます。また食事だって、ほっておいても腹がへってくれば、自分でなんとかできるものです。部屋がとっ散らかっていようと、何も氣に病むことはないではありませんか。あなたは働きすぎなのです。働き中毒なのです。

ところが彼女は、自分の家族をきちんとした中で生活させたい、そういう考えがあるせいか、このめちゃくちゃの整理は、テンから主婦たる者の義務であると考えて、何から何まで自分の手で片付けないと、氣が済まないのです。そのうえ、なまじやろうと思えばできる能力を持っているから、話はヤヤコシクなります。全てを自分の思いどおりにやり抜いたうえで、今度はその過程でたまったストレスの吐け口を、家のために働いたのだから当然だという氣もあるのでしょう、まわりの人間に求めるのです。それはグチとばかりは限りません。時には、ニコヤカな愛情の表現である時もあります。しかし、いずれにせ

よ、自分の業績に対しての全面的評価と同情を求めていることには変わりありません。それにいちいち応えていくのは、私には大変な気苦労でした。

何で自分の抱える問題を、自分だけのものとして解決しないのでしょうか。何で相手にその帳尻を持っていこうとするのでしょうか。もとをただせば、彼女が家事をやっているのです。彼女が好きでやっているのです。やるもやらぬも、全く彼女の自由なのです。そもそも私や父が口を挟むべき問題ではないでしょう。（私は彼女に対して、仕事や家事をやめろとは言ったことがあります）それが独立した人間と人間との間のルールです。相手個人の問題にこちらから立ち入らぬこと、そして相手からもむやみな干渉を受けないこと、人間の自主と尊厳は、まずそこから始まります。ところが彼女は、彼女自身の問題としてあるものの責任が、あたかも私や父にあるかのような言い方をしているのです。

「このスーパードグズ！」

「ダメ人間ばかり……」

そんな時、何か口答えでもしようものならもう大変、十倍百倍の雌叫びとなってハネ返ってきます。

「何ですって！」

「何にもわかっていないんだから……」

「私がいなかったら、この家はどうかうなっちゃうだろう！」

さわらぬ神に祟りなし、とはまさにこのことでしょう。私は彼女にサワルことができませんでした。しかし、君子危キニ近ヨラズ、などとばかりも言っていられません。父は不毛な口論に精力を費すよりは、と知らぬ顔の半兵衛をきめこんでいます。きっと彼女もそのうちわかってくるサ、というのが彼の言いぐさです。

しかし一方で、そんな暖簾に腕押しは無関心な態度をとられた母のほうは、今度はその感情の吐け口を私の弟のほうに求めてきます。自分のことを何でもわかってくれるシンパを作ろうというわけでしょうか。だが弟は小学生、そのことを理解させるにはまだ危険であるような年代です。「私とあなたは一心同体」みたいな接し方をされては、将来の彼も人生にけっして良い影響を与えないことはわかりきったことです。私は再三再四、時にはヤツカミ半分の口調でもって、そのことを指摘し続けました。でも返ってくるのは、

「ええ、ええ、よオクわかってますよ。でも私だけがいけないってわけね！ 全くみんなで、女ばかりに責任をおしつける……」

といったような非生産的なことばかり。これでは初めから、何の相互理解もできません。しかし放っておけません。このままでは私が耐えきれないばかりでなく、彼女にとつては不幸です。弟にとつては災難です。しかし正攻法は効きません。で、私は別の方策

を考えました。要するに問題は全て彼女の働きすぎからきている。とすれば、まずそこから手をつけるべきです。私は或る日、思いきって母に向かって言ってみました。

「いろいろ考えたのだけれど、ぼく達にばかり顔向けてるんじゃないくて、何か趣味に熱中したらどうかかな。そうしたら、そんなにイライラすることも、減っていくと思うんだ。たとえば前に言ってたけど絵を描くとか……」

最初は母も穏やかな顔をして聞いていました。この子は私が大変なのはわかっているんだ、というワケでしょう。しかし、やがてこれ見よがしといったタメ息が始まります。

「そうできればいいわねエ、フーツ」

ここで調子に乗って強弁したのがマズかった。やがて彼女の顔が険しくなってきました。

「だけどそんな時間あるわけじゃないの、少しは考えて頂戴よ……」

「でもこのままでは、お互いに不幸ですよ、家の者皆が苦勞する」

「ちょっとそれどういう意味？　まずアンタのほうこそ、もっとも家のことわかってないじゃないの」

「そう考えるのがオカシイのですよ」

「どこがオカシイ！　言っときますけどね、もの食べたあといつも食器を散らかしてるのは、一体どこの誰なの？　私の一日の始まりは、あなたの夜食のアト仕末からなのよ！」